

三縁

7月号

2012
No.644

あおい

たなばた

日本語の中には、漢字の読み方に難しいものがありますが、「七夕」と書いて「たなばた」と読む、随分無理な読み方です。たなばた祭りは、太陰暦の七月七日の夜に、天の川の兩岸にいる牽牛星(ひこぼし)と織女星(おりひめ)が、カササギの翼をのべて橋として、織女星が渡って出会いをすると中国の伝説が元になって、日本でも行われるようになったものようです。

日本では五節句の一つとして、夜に庭先に供え物をして、竹を飾ってその葉に五色(青・黄・赤・白・黒)の願い事を書いた短冊を下げて、手芸・書道等の上達を願うことが行われるようになりました。

また日本の農村では、広く七夕をお盆の一部と考えて、精霊さまを迎える藁でできた馬を飾ったり、墓掃除、衣類の虫干し、井戸さらえなどをしたと、日本国語大辞典には出ています。

現在では七月にお盆の行事をするのは、東京都と静岡県の一部に限られてしまったようで、殆どの地域が八

法主 八木季生

月にお盆の行事が行われていますが、『仏説盂蘭盆経』では七月十五日と説かれていたことは前にも申し上げましたが、これは歴法の改正の受け止め方の相違が原因となった現象です。しかし七夕は、七の夕と書くくらいですから、七月に行われることが多く、一月送らせて行われる地域もあります。今も歌われる昭和十六年三月に、文部省発行の『うたのほん 下』に掲載された童謡「たなばたさま」には、次のような歌詞が載っています。

権藤はなよ・林 柳波(作詞)
下総院一 (作曲)

① ささのは さらさら

のきばに ゆれる

おほしさま きらきら

きんぎん すなご

② ごしきの たんざく

わたしが かいだ

おほしさま きらきら

そらから みる